

# 創作する自己と自伝性の社会学

——マンガに作者が登場するとき——

梶山女学園大学 鎌田大資

## 1 目的

シンボリック・インターラクショニズムにおいて、ウィリアム・ジェームズやジョージ・ミードを源泉とする社会的自己論は大きな理論的遺産である。マンガが存在するためには、すべてを機械に頼る創作法が機能する場合を除き、その作者たる個人や集団などの具体的な生物学的人間の存在が不可欠であろう。作者が漫画作品に登場する場合の表現特性を、自己論の理論的系譜に照らして考察する。

## 2 方法

作画と脚本部門を分離する分業体制もマンガの産業化と同時に成立してきたが、原作者であれ、作画とストーリーの両方をメインで担当する場合であれ、マンガに作者が登場する場合、そこには独特な文学性が漂い、日本で独自に発達した私小説という文学分野との共振関係に立ちつつ、マンガ表現の芸術性を称揚するキザなダンディズムが漂う。しかし果たしてマンガ表現における自伝性とはそれだけのものだろうか。本論ではマンガ表現における作者の自己言及性は、漫画というメディアの表現特性自体の核に食い込んでいると考える。その点を下記のような代表的事例で考察する。

- 1、最新ヒット作でアニメ化もされた『バクマン』（原作・大場つぐみ、作画・小畑健、2008-12）はマンガ製作における原作、作画、編集の三者、および競合する作家たちとの相互影響関係までを描き、ジャンプ系正統派少年マンガにおける分業、競争体制の職業社会学を、マンガにおいて実現する。
- 2、マンガは、キャラクターのセリフや身振りという演劇性、身体性をおびたものにより表現が成立し、作画する作者の身体的な動作や喋りの癖、セリフやストーリーを考案する原作者の人生観や言語感覚が直接反映したものとなっている。マンガ家自身の身振りがキャラクターの動きに反映し、その面でキャラクター自体がマンガ家の身体の分身となる（手塚治虫）。
- 3、分業体制で製作している名義上の中心作者を、分業の分担者である協力マンガ家が描き、他者による中心作者の画像がアイコンとなって新たな創作物を派生させる（さいとうたかを）。
- 4、吾妻ひでお作品のうち、自伝的事件を描写した『失踪日記』以前の『不条理日記』などの諸作が、すでに熱烈なSF読者の読書日記として精神的、実質的な自伝となっている。
- 5、社会的評価の高い規範的ライフストーリーの描き手を自認する作者が、正面切って自伝を描く引退記念作において、過去の作品に自己解説を加えつつ自分自身というキャラクターを構築し、新たに虚構性に満ちた娯楽的なドラマ空間を構築してしまう（梶原一騎）。

## 3 結果・結論

こうしたケース・スタディは、メジャー、マイナー問わず、多様なマンガ家についても試みられうるだろう。それらを概観しつつ、マンガ家という創作する自己が、描くという行為そのものななかから立ち上がり、作者が生きる日常の世界とは違う新たな世界を創作物として立ち上がらせる。マンガという大衆文化作品の創作過程を自伝的作品から探り、社会的自己とその環境世界の相互形成の過程考察の手がかりとする。

文献：鎌田大資，2011，「第二次世界大戦後の文化史における二つの転機とライフストーリーの視点——マンガ表現史から心性史への架橋としての「一代記」もの」『人間関係学研究』9:13-25. 梶山女学園大学；雑賀忠宏，2010，「『マンガを描くこと』をマンガ家たちはいかに描いたのか——マンガ生産行為の真正性に関する言説としての『マンガ家マンガ』、ジャクリーヌ・ベルント編，『世界のコミックスとコミックスの世界』京都精華大学国際マンガ研究センター